

実施：2016年5月7日（土）14：00～17：30 ネットワーク東京事務室

主な内容：

- ・ 前回のおさらいをしました。
- ・ 内容はドラフトにそって順番に説明、質問、回答、討論という形で進行しました。
- ・ ドラフトでは図がうまく書けていなかったり、間違っている個所があるのでその点、気を付けて読んでほしいというお願いをしました。（改定版を作成中です）
- ・ 2-1でミクロ経済学の考え方の基本と高校までの教科書の扱いの違いを説明しました。ポイントは完全競争市場を前提にしたモデルとして扱うのが大学のミクロ経済学、つまり論理学であり演繹法的扱いをしているということです。
- ・ 2-2経済主体では、三主体を最初から扱うのではなく、家計と企業と市場をまず扱い、そののちに政府が登場という理解をしておいた方がよいと述べました。
- ・ 2-3の消費の理論は、正直新井も自家薬籠中の物としているわけではないので、必要な個所がどこなのか、また、その背景にはこんな論理で導出されているという構造をおおまかに（ぼんやりと）わかればよいと述べました。このあたりがエコノミストと経済教育関係者との違いになります。
- ・ 需要曲線の導出では、予算制約線と無差別曲線の接点の変化を迫りかけることで、右下がりの需要曲線が描けることを確認すれば可です。
- ・ 弾力性は入試問題にもでてくるので変化率であること（微分の世界）を確認しながら、需要の価格弾力性から一般財と必需品の区別、交差弾力性から代替財と補完財の区別がつけばそれでOKです。
- ・ 家計に関しては労働の供給曲線も問題になりますが、その導出よりも、労働の場合は家計が供給側になることをきちんと理解しておくことが肝心です。
- ・ 2-4の生産の理論もミクロ経済学では厳密性を追求する箇所ですが、教えるための経済学ではなぜ右上がりになるのかをおぼろげながら理解できればそれでいいとします。その際、供給曲線が限界費用曲線であることはしっかり押さえておいてください。ここが供給曲線に関してはポイントになります。その簡単な説明は、コストをかけてどれだけの値段だったら供給するかを提示させて（留保価格）安い順に並べてみればよいという手順で理解できるはずですが、これが生産者余剰の理解につながります。
- ・ 2-5需要供給の理論の箇所が一番大事なところですが、需要供給曲線の二つの読み方が最初の大事な箇所です。また、シグナルとしての価格の理解、そこからインセンティブという概念が登場します。さらに経済実験で実際に均衡価格が成立することも確認できます。二つの読み方に関連しては余剰概念で市場経済の効率性を読むことができます。（テキストのこの箇所はグラフが不十分できちんとしたものではないので改定しました）
- ・ 曲線のシフトの理解も大事なポイントです。ここでは、事例をもとにシフトによる余剰の変化と競争市場の効率性を確認しておいてください。大学入試にも頻出事項です。
- ・ 当日各人が持参したミクロの図解が入ったテキストを参考にしながら、教えるためには何が必要か不要かを再確認しておいてください。
- ・ 次回は市場の失敗、6月25日（土）10：00～ 寺子屋本体は14：00～